

もの言う牧師のエッセー 第112話

「義一さん」

関西の論客、藤本義一氏が亡くなって早くも一年以上が過ぎた。高度成長の時代からバブル期までの25年間にわたって、深夜番組「11PM」の大阪制作分の司会を25年間務めるいっぽう、直木賞作家として西鶴や織田作之助などの大阪町人文化の文芸・伝統を掘り起こした人だった。

当時、同番組キャスターだった大橋巨泉から「ギャラいくら貰っているんだ」と尋ねられ、自身が大橋氏の1/7程しか貰っていなかったことを知ったそうだが、自分は作家であるという姿勢から、ギャラの値上げは一切口にしなかったらしい。また、原発の危険性を告発していた広瀬隆氏が出演した際には、生放送で原発業界に都合の悪い部分を編集でカットできない為、局のスタッフがCMの合間に「広瀬に喋らせるな」と、彼を怒鳴りつけたそうだが、「事実を言って何が悪い!」と一喝、そのまま番組を続行させたこともある。阪神大震災の時には、彼は寝ていた体をひねった直後、倒れて来たたんすの金具が枕に突き刺さる体験をし、その後は震災遺児の心のケアの施設造りのために奔走。当時、報道ヘリコプターのために「救援を求める声がかき消された」として救助活動に支障が出たことでマスコミを痛烈に批判するなど、とにかく大阪商人の如く人の本音に即したモラルに生きた人だった。

そんな彼が、若い頃シナリオライターとして師事した映画監督の川島雄三から叩き込まれたのが、「プロは嫌なことをするから好きなことができる。アマは嫌なことを避けるから好きなことができない」だった。なるほど、

「患難をも喜んでいる。なぜなら、患難は忍耐を生み出し、忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を生み出すことを、知っているからである。」

ローマ人への手紙5章3-4節、口語訳、

という聖書の言葉はこういう意味だったのかと妙に納得した。そう言えば、キリスト自身が神であるにもかかわらず、わざわざ人間の世界にやって来て十字架による人類の罪の身代わりをするなどという滅茶苦茶なことに耐えられた。彼はその身をもって、苦しみを乗り越えてこそ“義”なることを成就できることを示し、それがどれほど辛いことであるかを教えてくれた。だからこそ彼は、“正義に一直線”の救世主たりえるのである。

2013-12-12

